



Title	シンハラ語を母語とする日本語学習者における日本語の対のある自動詞・他動詞の習得
Author(s)	Dona, Dassanayaka Pavithra Oshadhi
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96179">https://hdl.handle.net/11094/96179</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名	( Dona Dassanayaka Pavithra Oshadhi )
論文題名	シンハラ語を母語とする日本語学習者における日本語の 対のある自動詞・他動詞の習得
<p>論文内容の要旨</p> <p>日本語学習者における日本語の対のある自動詞と他動詞(以下自他動詞とする)の習得に関する研究は長く行われているが、現在でも日本語教育現場で課題が残されている項目である。本論文では、日本語教育における自他動詞の導入について、自他動詞の語彙的観点から自他動詞の判断に関わる様相について、自他動詞の文法的観点から用法に適した助詞・自他動詞の選択について、学習者の自他動詞習得の傾向にどのような特徴が見られるかを総括的に明らかにした。加えて、本論文はこれまでの自他動詞の先行研究で対象としてこなかった、シンハラ語を母語とする日本語学習者（以下SLJLとする）における日本語の対のある自他動詞の習得について明らかにし、SLJLに対して自他動詞を教える際の注意点を提案することを最終的な目的とする。</p> <p>本論文は全部で6章からなる。</p> <p>まず、第1章では、SLJLの学習背景に焦点を当てた。まず、スリランカでは日本語専攻者が増加しており、中等教育後半から日本語を学ぶ学習者が多いことについて述べた。次に、SLJLの母語であるシンハラ語の自他動詞の特徴についてまとめた。シンハラ語にも自他動詞対の概念が存在することを指摘し、その特徴について先行研究から得た情報を参照した。その上で、自他動詞の導入や練習の方法が実際の学習者のニーズに適合していない可能性があるため、本研究では具体的に学習者の自他動詞の対の習得に焦点を当てて検討する必要があることを指摘した。</p> <p>第2章では、本論文で扱う自他動詞の範囲を示し、対のある自他動詞の習得に関する先行研究の成果と残されている課題について具体的に指摘した。それらを踏まえ、本研究では、「語彙項目としての自他動詞の習得（つまり、語彙を正しく選択すること、かつ、自他動詞を正しく判断すること）」と「文法項目としての自他動詞の習得（つまり、助詞と動詞の正しい組み合わせを用法別に正しく選択すること）」の2つの観点から、以下の3つの研究課題を設定した。</p> <p>課題Ⅰ スリランカの日本語学習者にはどのように自他動詞が導入されているか。</p> <p>課題Ⅱ 語彙項目の観点から対のある自他動詞の習得に関わる様相は何か。解答傾向にどのような特徴が見られるか。</p> <p>課題Ⅲ 文法項目の観点から「助詞＋自他動詞」の習得に関わる様相は何か。解答傾向にどのような特徴が見られるか。</p> <p>以上の3つの課題を検討するために第3章から第5章まで、次の方法で調査を行った。</p> <p>第3章では、本論文の課題Ⅰを明らかにするために教科書分析と授業観察を行った。具体的には、対のある自他動詞という概念に触れる最初の一步である1.スリランカで出版され使用されている独自の教科書『サチニさんといっしょ』（以下、『サチニさん』）で自他動詞がどのように掲載されているか、2.自他動詞を実際の授業で学習者にどのように指導するか、の2点について検討し、SLJLが対のある自他動詞をどのように導入されているかを調査した。まず教科書分析において、『サチニさん』では語彙項目として、また、文法項目としてどのような自他動詞が掲載されているかについて分析した。次に、授業観察において、初中級のSLJLに対して日本語を教えている日本語教師（シンハラ語母語話者）AとBの2名の協力を得て、Zoomで録画された自他動詞のオンライン授業を2つ観察し、実際にどのように導入されるのか分析した。以上の調査結果を踏まえ、自他動詞導入上の問題点や課題を取り上げた。教科書分析の結果、『サチニさん』では語彙項目あるいは文法項目として自他動詞のみを取り上げた単独の課はないが、教科書全体で101の自他動詞が掲載されていることが明らかになった。教科書では文法項目としての自他動詞の基礎的な部分への言及は少なく、SLJLに『サチニさん』の第12課における「～テイル」「～テアル」などを導入する前に、日本語教師は補足資料などを作成し自他動詞の基礎的なところを教えることがわかった。授業観察では、教師は動詞の意味を説明する際に数多くの絵やイラストを使用し、シンハラ語の動詞との対応に触れながら、主にシンハラ語を使用して授業を行っており、教師AもBも、教科書でペアとしてあげられていない動詞も、動詞の難易度に関わらず、授業ではペアとして扱っていた。SLJLを対象に行われる実際の授業では、自他動詞をミニマルペアで導入する傾向があることがわかった。以上の結果から、現在授業でとられている方法での導入・練習は学習者が文脈</p>	

に応じた日本語の自他動詞の選択を誤らせる原因となる恐れがあり、自他動詞を判断する際に誤用を招きやすいことを指摘した。

第4章では、本論文の課題 II に焦点を当て、自他動詞の語彙的な側面から、自他動詞の対の判断に関わる様相を総括的に検討した。具体的には、1. 学習者の語彙知識が自他動詞の意味判断に関係するか、2. 自他動詞対の難易度が学習者の自他判断に影響を与えるか、3. 学習者が自他動詞を対として覚えているか、4. 学習者にとって自動詞と他動詞のどちらの理解が進みやすいか、5. 自他動詞の形態的な対応パターンが自他動詞の区別に影響を与えるかを検討した。このように、SLJLが対のある自他動詞を習得する上での語彙的な問題について明らかにするために、SLJL39名を対象として、日本語の語彙テストと自他判断テストを実施した。語彙テスト(大和・玉岡・茅本(2016)が開発した非漢字圏学習者向けの語彙テスト)は、自他判断テストに先立って調査協力者の日本語の語彙知識を把握するために行った。自他判断テストでは24対の自他動詞に関する意味判断とその動詞の自他判断を尋ねた(自他動詞ペア24対×39名=936解答(総計観察数))。語彙テストと自他判断テストの相関を調べたところ、両テストの間に正の相関があり、学習者の語彙知識が高いほど、自他動詞の意味が正しく理解できているという傾向が確認できた。次に、先行研究を踏まえ、自他動詞の意味判断に関わる要因として、語彙知識による学習者のグループ(上位群、下位群)、動詞の難易度(易しいものから難しいものへと順番に初級前半・後半レベル、中級前半レベル、中級後半・上級レベル)、自他動詞の対応パターン(パターン1・-ARU(自)→-ERU(他)、パターン2・-U(自)→-ERU(他)、パターン3・-ER(自)→-U(他)とパターン4・-RU(自)→-SU(他))が自他動詞の意味判断の正誤に影響すると予想した。そこで、学習者の自他習得の全体像を把握するために「①自他動詞ともに正解、②自動詞のみ正解、③他動詞のみ正解、④自他動詞ともに不正解」の正誤パターンにおいて解答を観察した。分析方法として、このような自他動詞テストの正誤に対して複数の影響が予想される要因を総括的・階層的に検討できる、決定木分析の一種である、分類木分析を用いた。その結果、動詞の自他の意味理解の正確さは動詞の難易度に依存するところが大きいこと、自他動詞の形態的な対応パターンは二次的な影響要因として存在すること、学習者の語彙知識の豊富さは限定された条件下でのみ影響することがわかった。自他動詞習得は自他動詞の難易度に沿って進む傾向があることがわかった。さらに、語彙レベルが高く難しい自他動詞においては、自他動詞対として理解することが難しい傾向があることも明らかになった。特に難しい自他動詞対に関しては、学習者の語彙知識の豊富さが関与している傾向があると言える結果となった。また、全体的に学習者の解答パターンを検討すると、SLJLは自他動詞を対として覚える傾向があると明らかになった。また、対で覚えられない自他動詞については、他動詞の正答率の方がやや高かったが、その場合でも自動詞の正答率と比べて統計的な差はみられなかった。他にも、自他動詞の形態的な対応パターンの中の「パターン3・-ERU(自)→-U(他)」は「パターン1・-ARU(自)→-ERU(他)」、「パターン2・-U(自)→-ERU(他)」、「パターン4・-RU(自)→-SU(他)」とは異なる正誤傾向にあることが明らかになった。本研究では先行研究を参考に、「-SU」で終わる動詞が他動詞で、「-ARU」で終わる動詞が自動詞であると判断しやすいだろうと予想したが、予想に反し、正答率にそのような傾向は見られなかった。これらの結果から、自他動詞を導入する際には日本語教育における定番の自他動詞対のみを取り上げるのではなく、自他動詞の対応パターンとパターンの特徴にも注目し、学習者にとって自他の区別が難しい自他動詞対も取り上げることが重要であることが示された。

第5章では、本論文の課題 III に焦点を当て、自他動詞の文法的観点から、自他動詞と助詞の選択の正確さに関わる様相について総括的に検討を行った。具体的には、1. SLJLの自他動詞の理解と日本語の文法知識にはどのような関係があるか、2. SLJLの助詞と自他動詞選択の誤りに影響を与える要因は何か、学習者による自他動詞選択の正確さには自他動詞の用法によって差があるか、3. SLJLの助詞と動詞の選択にはどのような特徴があるか、の3点を検討した。このように、SLJLが対のある自他動詞を習得する上での文法的な問題について明らかにするために、SLJL42名を対象として、日本語の文法テストと助詞+自他動詞テストを実施した。文法テスト(早川・玉岡(2015)が開発した改訂文法テスト)は助詞+自他動詞テストに先立って調査協力者の日本語の文法知識を把握するために行った。助詞+自他動詞テストでは、合計18問において、助詞+自他動詞の選択を尋ねた(自他動詞の問題18×42名=756解答(総計観察数))。まず、文法テストと助詞+自他動詞テストにおいて相関を調べたところ、学習者の文法知識が高いほど、助詞+自他動詞の選択の正確さにやや強い正の相関があることが確認された。次に、学習者の助詞と自他理解に関わる要因として、学習者の文法知識で分けた2つのグループ(上位群、下位群)と、3つの自他動詞対(落ちる-落とす、割れる-割る、壊れる-壊す)、自他動詞の用法6つ(自動詞-用法①、用法②、用法③、他動詞-用法④、用法⑤、用法⑥)が学習者の自他理解の正誤に影響すると予想した。そこで、文脈による助詞+自他動詞の習得の全体像を把握するために、①正答(助詞と自他動詞ともに正解)、②動詞区別の誤用、③助詞区別の誤用、④誤答(助詞と自他動詞両方不正解)の4つの解答パターンにおいて解答を観察した。分析方法として、このような助詞+自他動詞テストの正誤に対して複数の影響が予想される要因を総括的・階層的に検討できる、決定木分析の一種である、分類木

分析を用いた。その結果、助詞＋自他選択に最も影響するのは自他動詞の用法で、文法知識の豊富さが二次的な影響要因として存在することがわかった。さらに、分類木分析の結果から全体としての正答率をみると、自動詞の用法と、他動詞の用法における解答傾向がそれぞれ異なることが確認できた。ただし、今回の調査では、「壊れる/壊す」、「落ちる/落とす」、「割れる/割る」の3組の自他動詞対のみを用いたため、動詞間の誤用傾向の差異は見られなかった。全体的に学習者の解答パターンを検討すると、自動詞の場合は「が」、他動詞の場合は「を」という助詞の理解が動詞の理解より先に進んでいると言える結果となった。また、用法別に学習者の解答について検討した結果、自動詞使用場面と、他動詞使用場面における解答傾向がそれぞれ異なることが確認できた。自動詞使用に関して、用法①(対象の変化・内発的变化)、用法②(自然現象・被害や迷惑の意味・無情物の非意図的な作用による対象の変化)、用法③(行為の結果に焦点・対象の状態描写)の解答では、助詞と動詞ともに正しく使用できた学習者が多かった。このような結果担った理由として用法①用法②用法③においては、SLJLにとって母語の自他使用傾向が日本語の自他習得の助けになっている可能性が示唆された。他動詞使用に関して、まず、用法④(意志的行為による対象の変化)においても、前述した用法①,②,③と同様に解答傾向として助詞と動詞ともに正しく使用できた学習者が多かった。用法④における学習者の解答でも、シンハラ語と同じく、他動詞の選択率が高い傾向にあることから、一部の他動詞用法においても正の転移が発生していることが明らかになった。一方、用法⑤(不注意で、他者に被害を与え他者へ責任を表す場合・自責表現)と用法⑥(自分に関して、大変なことが起きた場面・身体表現)の解答においては、助詞と動詞どちらも誤っていたSLJLが多く、SLJLにとって比較的難しい用法であることが明らかになった。用法⑤と用法⑥においても、シンハラ語での自他動詞の使い方とSLJLの日本語での解答が一致しており、これらの誤用は母語からの負の転移による誤用であることがわかった。

以上を踏まえ、第6章では本研究の考察を行い、教育への示唆を述べた。本研究の一連の調査結果から、語彙知識と文法知識を分けて分析し、それぞれが自他動詞習得に与える影響を明らかにした。それにより、文法知識の豊富さが用法ごとの助詞と自他動詞の組み合わせの正確さに影響を与えること、また、語彙知識の豊富さが難易度の高い自他動詞の意味判断に強い影響を与え、自他動詞の理解において語彙知識も特に重要であることが新たに明らかになった。このように、自他動詞の習得が単なる文法知識に依存するものではなく、語彙的な観点も含めた総合的な日本語スキル・能力を必要とするものであることが実証された。先行研究の主張と本論文で明らかになった結果を踏まえ、SLJLに対する自他動詞の教育について、以下の点が示唆できる。第一に、SLJLに対して自他動詞を対で導入することによって、学習者は、日本語の自他動詞が形態的に対になっても意味的に対にならないことにも気づくことができ、それは自他動詞習得の手助けになると考えられる。第二に、助詞＋自他動詞テストの解答パターンの特徴を観察すると、誤答の中では助詞選択の誤用は、動詞選択の誤用より少ないことが本研究の結果から明らかになったことから、動詞の区別が学習者にとって自他動詞習得上での難しい点であると考えられる。その点を踏まえ、日本語の自他動詞を導入する際に自他動詞対の見分け方にも焦点を当てた指導が必要である。第三に、学習者の母語がシンハラ語である場合、日本語とシンハラ語の自他動詞の使用の違いに注意を払う必要がある。SLJLの場合、母語のシンハラ語の影響で自動詞用法においては概ね正確に自動詞を選択できていたが、他動詞用法においては一部の用法で母語と日本語との自他選択基準のずれによる誤りも見られた。以上のように、同じ母語の学習者を対象に詳細に調べたことにより、母語による影響を明らかにし、その影響を考慮した自他動詞の指導を行うことが重要であることを示すことができた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( DONA DASSANAYAKA PAVITHRA OSHADHI )		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 小森 万里
	副 査	教 授 今井 忍
	副 査	教 授 荘司 育子
	副 査	教 授 岸田 泰浩
	副 査	京都大学 准教授 大和 祐子

## 論文審査の結果の要旨

日本語の自動詞・他動詞の習得は、日本語非母語話者にとって難しいことが知られている。日本語学習者における自動詞・他動詞習得の困難点は大きく分けて2つあり、1つは意味的に適当な語を選択し、それが自動詞か他動詞かを判断すること、もう1つは助詞と動詞の組み合わせを用法別に正しく選択することである。本審査対象論文では、前者を「語彙項目としての自他動詞の習得」、後者を「文法項目としての自他動詞の習得」と呼び、その両面から総合的にシンハラ語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の習得を明らかにしている。さらに、本論文は、量的データの分析から明らかになった点に基づいて、スリランカにおける日本語教育で自動詞・他動詞をどう扱うべきかを提案した研究としては、初めてのものである。このような点から、本論文はこれまでの多くの日本語の自動詞・他動詞習得研究で課題として残されていた点、従来取り上げられてこなかった点についても明らかにしようとした意欲的な論文であると言える。

本審査対象論文は全6章で構成されている。第1章では、スリランカにおける日本語学習者の学習背景に焦点をあて、スリランカの日本語教育事情と本論文の調査協力者の母語であるシンハラ語における自動詞・他動詞の表現についてまとめられている。この章では、まず、シンハラ語を母語とする日本語学習者は増加傾向にあり、それに対して彼らを対象とした外国語としての日本語習得研究が少ないことが指摘されている。次に、シンハラ語に関する先行研究にも触れ、シンハラ語においても日本語の自他動詞対に似た概念があることから、シンハラ語を母語とする日本語学習者には、日本語の動詞についても自動詞と他動詞を対で導入する方が定着しやすいのではないか、という仮説をたて、本論文では対になる自動詞・他動詞に限定して議論することが述べられている。さらに、スリランカでは、ほとんどの日本語学習者が同じ教材を使用して日本語を学ぶことに触れた上で、その教材での自動詞・他動詞の導入や練習の方法がシンハラ語母語話者にとって言語習得の面から効果的なものかを検討する必要があると述べている。

第2章では、日本語の自動詞・他動詞研究および日本語教育の立場から見た自動詞・他動詞の習得研究について概観し、前者では、自動詞・他動詞の語彙的な側面あるいは文法的な側面の一方のみから見た研究が多かったこと、後者では、調査の方法により、学習者にとって自動詞・他動詞のどの部分の理解が十分でないのかを把握するのに限界があったことなどを指摘した上で、本論文における立場を明示し、シンハラ語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の習得について明らかにするために、3つの研究課題をたてている。

研究課題Ⅰ スリランカの日本語学習者にはどのように自他動詞が導入されているか。

研究課題Ⅱ 語彙項目の観点から対のある自他動詞の習得に関わる様相は何か。解答傾向にはどのような特徴がみられるか。

研究課題Ⅲ 文法項目の観点から「助詞＋自他動詞」の習得に関わる様相は何か。解答傾向にどのような特徴がみられるか。

第3章では、研究課題Ⅰに答えるべく、スリランカ国内の中等教育機関で使用されている教科書での自他動詞の扱われ方を分析している。さらに、実際にシンハラ語を母語とする学習者に自動詞と他動詞を導入する授業での導入方法、自動詞・他動詞の概念の説明や練習などについて分析している。その結果、現在スリランカで使用されている日本語の教科書では、自動詞や他動詞の概念を明示的に説明したり、自動詞と他動詞を対で導入したりすることはしていないことを明らかにしている。一方で、授業観察の結果からは、教育現場では授業を担当する教師の判断

で、シンハラ語で自動詞・他動詞の概念や用法が説明され、教科書での出現順序や語の難易度にかかわらず、できるだけ自動詞と他動詞を対にして導入し、当該教科書にはない自動詞と他動詞を対応させたリストを自習用に学習者に配布する様子が見られたと報告している。

第4章では、研究課題Ⅱに答えるべく、自他判断テストを用い、語彙項目としての自動詞・他動詞の習得がどのような背景要因に影響を受けているのか、分類木分析を用いて検討している。分析の結果、語彙項目としての自動詞・他動詞の理解は自他動詞の難易度によるところが大きいこと、自他動詞の形態的な対応パターンは自動詞・他動詞を正確に理解する上で二次的な影響要因であること、一般的な日本語の語彙知識は自動詞・他動詞の理解には限定的な条件下のみで影響する程度であったことを明らかにしている。さらに、申請者は、この自他判断テストの調査協力者の解答を、「自動詞・他動詞がどちらも正しく理解できている」「自動詞のみ正しく理解できている」「他動詞のみ正しく理解できている」「自動詞・他動詞どちらも正しく理解できていない」の4つの解答パターンに分類して分析をすることで、シンハラ語母語話者が自動詞と他動詞を対で習得しているのか、もしそうでないのなら、自動詞・他動詞ではどちらが先に習得されるのかを明らかにすることに成功している。分析の結果、シンハラ語母語話者の場合は自動詞と他動詞を対で習得していく傾向がみられること、対になる自動詞と他動詞で正答率に差がある場合でも統計的に有意なほどいずれかの動詞の習得が先行する傾向はみられなかったことを明らかにした。これらの結果は一部先行研究と異なる結果であったが、このことについて申請者は、自動詞・他動詞のどちらの習得が先行するかは学習者の母語の自動詞・他動詞の形態的特徴が影響している可能性があるとして説明している。

第5章では、研究課題Ⅲに答えるべく、助詞＋自他動詞テストを用い、文法項目としての自動詞・他動詞の習得がどのような背景要因に影響を受けているのか、分類木分析を用いて検討している。分析の結果、適切な助詞＋自動詞・他動詞の選択に最も影響を与えるのは自動詞・他動詞の用法であること、学習者の文法知識も適切な助詞と自動詞・他動詞を選択する際に影響を与えていること、文法知識が豊富になってくほど日本語母語話者に近い自他動詞の選択が可能になってくるとを明らかにしている。また、申請者は学習者の解答パターンを分析したところ、適当な格助詞を選択することは全体的によくできていたと報告している。これは従来の研究で指摘されていた、まず動詞を選択できるようになった上で、適切な格助詞の選択ができるようになるという自動詞・他動詞の習得段階とは異なる結果であったと述べている。さらに、申請者は用法別に学習者の解答を検討したことにより、自動詞使用場面と他動詞使用場面では、正答率や解答傾向が大きく異なっていることも明らかにした。自動詞使用場面は概ね大きな混乱なく習得が進んでいることがうかがえる一方で、他動詞使用場面のうち「自責表現」用法と「身体表現や話者に対する被害」用法では自動詞を選択する学習者が多かったことが報告されている。申請者はこれらの用法の自他選択において、シンハラ語での自動詞・他動詞的表現の選択基準と比較した上で、日本語における動詞の自他選択基準が学習者の母語であるシンハラ語の影響を受けていることを論証している。

第6章では、第3章から第5章までで明らかになったことを総括し、シンハラ語を母語とする日本語学習者に対して、日本語の自動詞・他動詞をどのように導入することが望ましいか、また自動詞・他動詞の教育において特に留意すべき点はどこかということを中心にスリランカの日本語教育へ示唆できることを論じている。申請者によって述べられた数々の教育的示唆の中でも、自動詞・他動詞の概念を既に母語で獲得している学習者にとっては自動詞と他動詞を対で導入することが動詞の形態的な対応や意味的な対応に気づくのに有効であるということ、一部の他動詞使用場面（用法）においては母語の影響により自他選択を誤る恐れがあるため特に注意が必要であるということは、スリランカにおける日本語教育に重要な示唆を与えるものである。

上述のように、本審査対象論文は、シンハラ語を母語とする日本語学習者の、対になる自動詞・他動詞の語彙項目としての習得および文法項目として習得の両面から、シンハラ語の自動詞・他動詞的表現との対応にも着目し、多角的に論じたものである。本論文のために収集したデータは、シンハラ語を母語とした学習者を対象とした貴重なものであるだけでなく、それらのデータは手堅く分析されており、その点も評価に値する。分析結果の解釈に説明不足だと思われる点があること、用語の使い方が統一されていないために読者に誤解を与える恐れがあることなど未熟な点も散見されるが、それらの点を考慮しても、今後の外国語としての日本語の自動詞・他動詞の習得研究に貢献する資料を提示できたという点で高く評価できる。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で審査対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。